

第五章 中 世

中世は、わが国最初の武士政権の時代で、源頼朝が相模（神奈川県）の鎌倉に幕府を開いたことにはじまり、幕府を倒して成立した建武新政を、再び武士勢力が倒し、鎌倉幕府を再興する形で室町幕府が成立し、その衰亡で終わっている。

第一節 横川院と島津荘

横川院の起 源 横川院とは、平安末期から戦国期にかけての院名である。院というのは、もともと

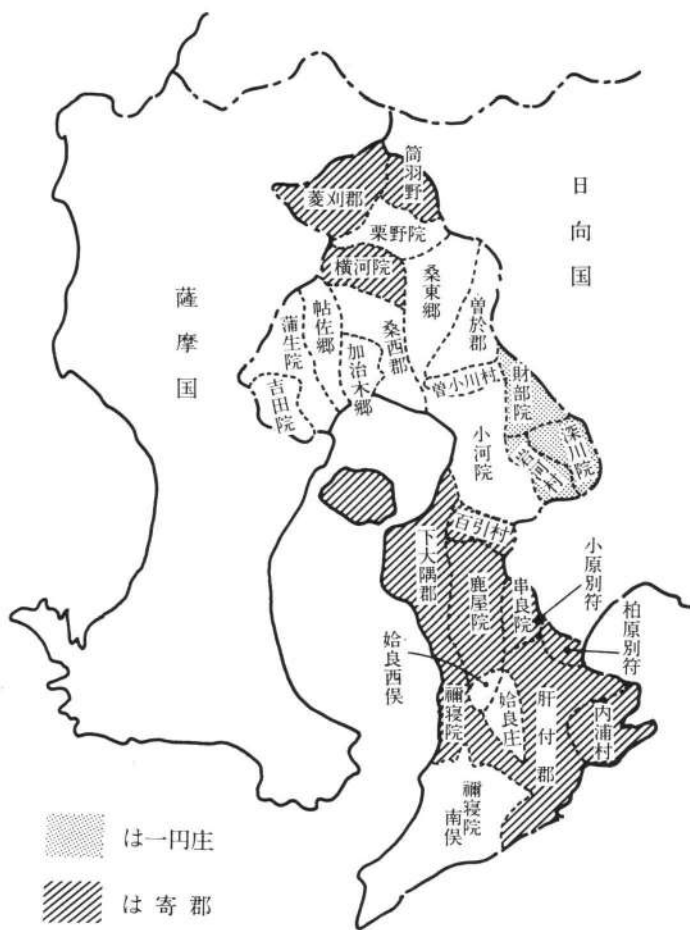
と律令制時代国府の管理下にあつて、租税を納入する倉庫のことであつたが、のちになつて一つの倉庫に租税を納入する地域を指して呼ぶようになった。貴族や寺院の勢力が増大し、班田收授の法（土地公有制度）が崩れて、荘園制度が発達してくると、のちには荘園（貴族や寺院の私有地）そのものを院というようになった。今でも伊集院とか、祁答院とかそのまま町名として残っているところがある。建久八年（一一九七）に完成した土地

台帳ともいふべき「大隅国図田帳」によると、横川院は寄郡といつて半不輸（国と荘園領主の支配を受ける土地）になっている。

横川院は『日本地名大事典』や五味克夫（鹿児島大学教授）の説によると、古代末に大隅国桑原郡の一地域が分離して、横川院として独立の行政区域になったものと推測される。中世初めの建久八年（一一九七）の「大隅国図田帳」に、島津荘寄郡のうちに「横川院三十九丁五段二丈」と見えており、鎌倉初期、横川は島津荘に組み入れられていた。これより約半世紀前の天養二年（一一四五）三月一二日付の「建部清貞宛前大隅掾建部頼清処分状」に、桑西郷内横川院、皆尾村とあつて、建部氏が横川院をはじめとする四か所の所領を処分している（「禰寝文書」）。建部氏は大隅国の在庁官人であるが、横川を開発し、横川院の成立、島津荘への編入に何らかの関与があつたのかもしれない。

島津荘

島津荘は近衛家領で、地頭は島津忠久である。島津氏の地頭職は鎌倉前期で没官となり、代わつて北条氏（名越）が有することになる。



他は正八幡宮領・国衙領等

第1圖 莊園地圖

建武政権下北条氏領は没収され、島津氏領となる。「旧記雑録」によると、建武二年（一三三五）一〇月七日に島津貞久が太政官符をもって横河院を含む中宮職領管

[illegible]

三州統一と 戦国期に入り、島津氏は三州統一の過程
横川 城 で、薩摩、大隅から日向への通路として
横川の確保を図った。しかしそのころ、横川院をはじ
め、日向真幸院にかけて、肝付庶流の北原氏が大勢力を
誇っており、しかも日向国伊東氏も勢力の南下を図って
いた。島津氏は永禄五年（一五六二）北原氏の内紛につ
け込み、肥後（熊本県）の相良頼房のもとに逃走してい
た北原兼親を、北原氏の当主に据えようとして、日向飯
野城に配置した。北原伊勢介とその子新介は、これに反

島津家系図 ②



などからして、その後も領主、地頭の交代があったものと思われる。

発して横川城に立て籠った。同年六月三日、島津貴久は伊勢介父子の立て籠る横川城に総攻撃を行い、北原氏は敗れ、多くの者が城中で自刃した。また、北原兼親のように球磨に逃れ相良氏を頼る者もいた。これは島津氏の三州統一の成る八年前のことである。

横川城には島津氏に帰服した菱刈隆秋が、同年九月に入城している（『旧記雑録』）。しかし、菱刈氏による支配は長く続かず、永禄一〇年（一五六七）城代菱刈中務ら島津方の攻撃によって落城し、隆秋は大口へ退いた。

菱刈退去後は島津氏の領有となり、のちに樺山氏に与えられている。また、地頭伊集院久春の名もみえること

第二節 中世の庶民の信仰と寺社

下ノ赤水小字梅ノ木迫に、建武二年（一三三五）の紀年銘のあるすこぶる立派な岩堂来迎弥陀三尊磨崖龕がある。古来岩堂観音として、横川周辺の人々の信仰を集めていた。

中世に建立された主な寺院として、阿弥陀寺、万亀山仙寿寺、安良山来福寺真乗院などがあったとのことだが、今はいずれも廃寺となっている。

一 岩堂来迎弥陀三尊磨崖龕

赤水の磨崖仏は、自然の岩石や崖面に彫られた岩堂観音仏像のことで、その方法には線彫り、浮き彫り（丸彫り、平肉彫り）などがある。仏像の代わりに梵字を彫ることもある。全国的には奈良時代にはじまり、平安時代になると各地で盛んに彫られるようになった。

鎌倉時代以後になると、周囲を龕状に彫りくぼめて仏像を浮き彫りにした形式がみられるようになった。赤水の岩堂来迎弥陀三尊磨崖龕はその代表的な一つである。この磨崖龕は通称岩堂観音と呼ばれ、昭和五七年（一九八二）五月七日、県指定文化財になっている。

赤水の岩堂観音は、下ノ梅ノ木迫の山中崖下にあつて、南北朝時代の磨崖仏である。天降川上流の深い溪谷にある傾斜角約八〇度の凝灰岩の岩肌を、地上約一・六〇メートルのところを底辺として、横長の矩形（高さ一・四〇メートル、幅三・五メートル）で、最大奥行き（深さ）〇・四五メートルに彫りくぼめ、その中に来迎弥陀三尊を、レリーフ状（浮き彫り）に彫り出している。

中尊と右脇侍勢至像の間に、

大施主法信

奉建立岩堂 沙弥観阿弥陀仏

并□□

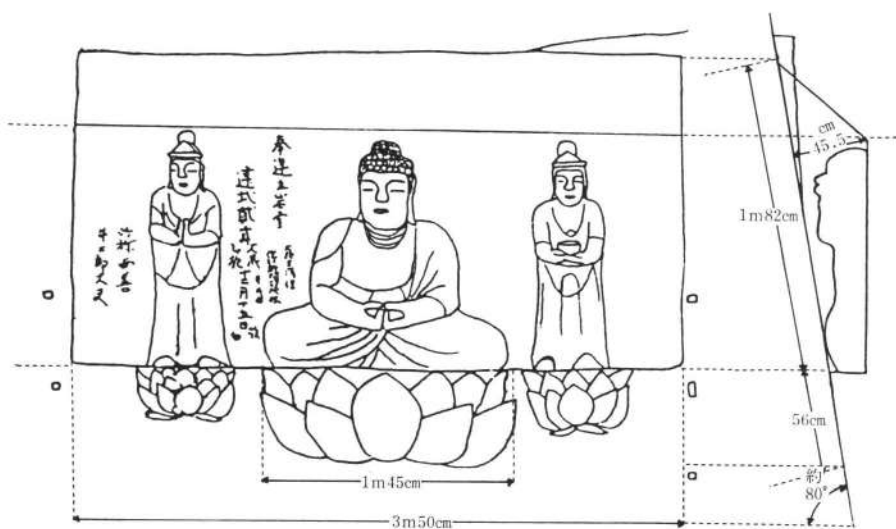
建武式年大藏乙亥十二月十五日白敬

勢至像と龕側壁の間に、

沙弥西善



岩堂来迎弥陀三尊磨崖龕



第2図 岩堂来迎弥陀三尊磨崖龕実測図

井二郎大夫(□は判読不明)

と文字が刻まれている。本県の磨崖仏としては、鹿兒島市の清泉寺跡の阿弥陀座像(建長二年=一二五〇)、川辺町清水の磨崖群(弘長四年=一二六四)の次に位置するものである。造形的にも鎌倉期の様式を残す優れたもので、傾斜が幸いして保存状況もきわめて良く、本県の仏教信仰を知るうえで貴重な文化財である。

昭和三四年三月七日、斎藤彦松(大谷大学教授)が、岩堂観音の調査を行った。その調査報告書に、次のように記述されている。

。磨崖三尊浮彫

a、内容と形式 来迎形弥陀三尊

イ、中尊 阿弥陀仏定印坐像

ロ、左脇侍(向って右) 観音菩薩立像

両掌上に念仏者を迎接の爲の蓮台を捧持し、所謂、「ムカヘボトケ」の形を為している。観音菩薩の頭頂の宝冠に、如来形の化仏の存する事は、此の種造像には規則化しているが、本像には之をみる事が出来ない。

ハ、右脇侍(向って左) 大勢至菩薩立像

両手を胸上に合掌して、所謂「オガミボトケ」の形

相となっている。頭頂の宝冠には通常「宝瓶」が表現されるが、本像にはそれを見ず、全くロ、の観音像宝冠と同形を為している。

b、計測値 三尊共に高さ一・四〇メートル、中尊膝巾一・四五メートル 三尊共浮彫凸出量〇・四〇メートル c、其他 三尊共光背らしきものをみる事が出来ない、此の事は此の種としては可成り異例に属する。

三尊とも若干前かがみとなり、龍はそれ以上に八十度の前かがみ(傾斜)を為している。仏龍の上部が仏像をおおっており、仏龍内部及び仏像の保存を良好ならしめている。

浮彫の程度は、厚肉彫というより丸彫に近い。

。磨崖線刻蓮座 磨崖仏龍の真下の岩壁に、三個の請花蓮華が線刻されている。中央のものは大きく、高さ〇・五六メートル、巾一・五〇メートルで、中尊の台座を形成している。両側の二つは、中央の約半分の大きさで両脇侍の台座となっている。何れもその蓮華の上端は、仏龍の下縁に接し、おのおのその上部の仏像を請戴するように線刻されている。丸彫に近い仏像に線刻の蓮座は、殆んど類例をみない組合わせである。

。磨崖小孔 磨崖仏龍附近に若干の小孔がある。左右対象の位置にあるところから、此の仏龍に関係する何等かの建築的痕跡と推定されるが、詳細については今後の研究をま

たねばならない。

。彫刻用具及び表面仕上 此頃日本の磨崖彫刻の多くは、その用具の主なものとして「つち」と「たがね」を使用したと想像されるが、岩堂観音の磨崖彫刻には、木彫用の「のみ」に類するものが使用されたと考えられる。特に荒削り後の細部彫刻には、そのように考えさせる点が多い。全体の感じも木彫様であって、たがねをつちで叩きつつ彫ったものではなく、木彫用ののみの痕目が仏像にも奥壁にも多くみられる。このような例は軟質の凝灰岩の彫刻にはありうる事で、本磨崖の岩質の硬度が推定される。

彫刻後の表面仕上げには、朱と墨が使用されたものと推定され、その痕跡もみられる。

。史上位置 九州はその全域に仏教の磨崖遺跡を保有し、磨崖美術に関しては日本を代表する地域となっている。しかしながら歴史的研究の基礎となるところの年紀銘を有するものは甚だ少くない。製作年紀の明らかかなものを列記すると

一、嘉禎三年六月十五日（一二三七）彦山磨崖彫刻群 福岡県田川郡添田町彦山

二、建長二年二月時正（一二五〇）清泉寺跡磨崖弥陀像

鹿児島県鹿児島市下福元七七二〇

三、弘長四年二月（一二六四）清水磨崖五仏種子 鹿児島

県川辺郡川辺町字清水

四、永仁四年二月二十八日（一二九六）清水磨崖仏塔群 鹿児島

島県川辺郡川辺町字清水

五、嘉禎元年三月十六日（一二三二）上小倉磨崖仏塔群 大分

県南海部郡上野村上小倉

六、建武二年十月十三日（一二三五）上弁城磨崖金界四印

会種子曼荼羅 福岡県田川郡方城町字上弁城小字岩屋

七、建武二年十一月十五日（一二三五）岩堂来迎弥陀三尊

磨崖仏龍 鹿児島県始良郡横川町下ノ字梅ノ木迫

岩堂観音は九州では七番目に位置している。

これをみて、赤水の岩堂観音が歴史的あるいは文化的立場からいかに貴重なものであるかがわかる。

昭和三三年（一九五八）七月発刊の『横

南朝の忠臣

川町郷土史』に「肝付家の墓碑二三基叢

中に埋没されしといえは建武の年号から推究して、南北朝時代、肥後の菊地家と共に吉野朝廷に孤忠を拔んで肝付家一族と何等かの因縁あるものと思わる」と記載してある。平成二年八月、岩堂観音周辺の墓碑探索を行ったが、それらしきものは見当たらなかった。

岩堂観音の周辺は、自然生の茶樹、茗荷が多い。また

磨崖仏の両側に椿が二本あって、何物かが埋めてあるとの伝説があるが、仏罰を恐れて発掘する人もいない。

岩堂観音をしのんでよんだ竜庵作の漢詩が第一鳥居のところに掲示されてある。

岩堂観音

莞爾星霜七百年

青苔仏像刻三尊

鑿跡非凡浮絶壁

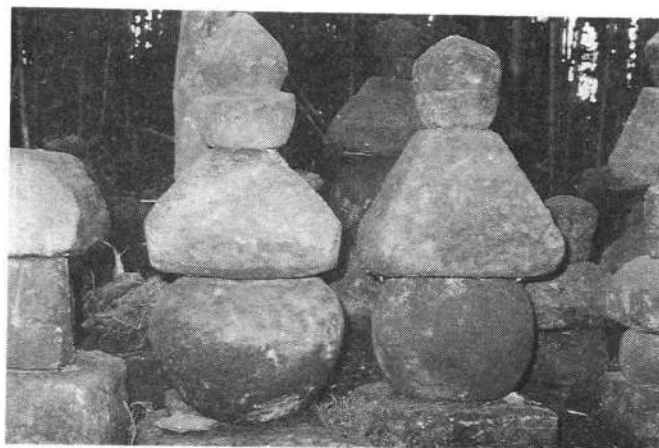
温容黙々論今人

二 中世横川の寺院

1 阿弥陀寺

安良小学校の西南、榊原岡の西部領域二反余りが阿弥陀寺の跡といわれている。現在は開墾されて、その一部を残しているだけである。

明治初年までは、高さ一丈ほどもある頼朝石といわれる五重の石



五輪塔

塔や寺の由来を記した碑があったそうだが、明治七年（一八七四）の山陵確定の際、土地の人たちが、事の煩雑、面倒をおそれ、夜ひそかにその碑石を搬出して埋没したといわれる。その場所は、崎山クミ宅氏神山ともい

い、後方の崖崩れともいい、田口宅古井戸とも言い伝えられている。

寺跡には、五輪の塔が多数埋没していて、昭和五七年（一九八二）八月一日、町教育委員会がその一部を発掘し、修理を行い、現在二二基が据えられている。五輪の塔の一基に元徳二年（一二三三）〇八月の文字が刻まれている。

また、阿弥陀寺の本尊と思われる木像が、現在正牟田の有村一夫宅に保存されている。

阿弥陀寺を詠んだ句に次のようながある。

横川のバミル高原諸文化の発祥の地

か阿弥陀が原は

霧島を東に望み安良岳を北に眺めし広潤の原

伽藍屋根高くそびえて梵鐘の響四隣に聞えたるらん

今はただ雑木林のその中に石塔などの積まれあるのみ

半ば磨滅したる石塔のその刻みなみならざるを賞し観るかな
信仰の中心たりし阿弥陀寺の流転のあとを偲ぶもあわれ

2 安良山来福寺真乗院

真乗院のことについて『三国名勝図会』に、

中之村にあり、本府大乘院の末にして、真言宗なり、本尊
十一面観音大士木立像 尺九分開山の僧名伝はらず、当寺より南の方
に、安良大明神本地の観音あり、管轄す、其蓮華座に、来福
寺新像作者正椿、永正六年云々の記文あり、然れば此寺の創
建は、久遠なること知るべし、安良山の号あるを以て見れ
ば、往古は安良神社の座主にてもありしにや、今は彼社に預
ることなし、当郷の祈願所なり。

と記述してある。

寺跡は川北の折田宅の杉林で、観音瀬戸入り口の岩窟がんくつ
の中に、木仏像と不動明王石像が安置されている。木仏
像は真乗院の本尊十一面観世音像で、永正六年（一五〇
九）正椿の作といわれている。その向かって右下に首な

しの仁王像二体が立てられてある。また、寺跡の裏の竹
山に、当時の僧侶の墓と思われるもの数基がある。

3 万亀山仙寿寺

仙寿寺は栗野徳元寺第四世の住持三了和尚の開山で、
寺跡は川北四元正文宅の西の畑で、北に雑木山を背にし
ているが、この山中に後記の墓二〇基ほどが三段に分か
れて立っている。その中で一番古い墓は、貞享二年（一
六八五）の紀年銘のあるもので、多くが住職の墓である。
このほかに土中に埋まったものもあるが、開山和尚、二
世和尚の墓は見つかっていない。また、馬場（通り）に
面した四元宅の辺りは寺の入り口であつたらしく、今も
築山に大きな仁王像二基が立っている。

仙寿寺について『三国名勝図会』に、

中之村にあり、栗野徳元寺の末にして、曹洞宗なり、本尊
釈迦如来、開山三了和尚徳元寺第四世 住持 第二世 鶴峯和尚 慶長十一年十
月十日遷化
といふ、是を中興開山と称す、三了和尚開基以後、衰廃せる
を鶴峯再造せるとぞ、往古北原氏の菩提所なり、寺内に北原
伊勢介、及び北原民部等が位牌を安す、又大中公の御霊牌を
安す、或云、横川城落去の後、怪異種々ありて鎮まらず、因

て怨霊降伏の為に、住持大中公の御牌を安ぜしに、怪異止しとなり、当郷の香火院とす。

と記述してある。このことからして横川城との関係が深いことがわかる。

横川城落城ののち、横川は島津家の領土となって、その家来伊集院久春が横川地頭として城山本丸にいた。ところが不自由が多いので仙寿寺馬場に移居したといわれるが、その屋敷がどの辺りであったかは全くわかっていない。

仙寿寺跡墓石（昭和三二年調べ）は次のとおりである。

（下段）

。通安妙達大姉

。則心□定門（半ば埋れて片平石）

五月十五日

。玄翁情三居士（貞享五戊辰年六月二日）

。前溪妙窓大姉（享保十八癸丑年八月八日）

（中段）八基



仙寿寺僧侶墓

。仙寿前住大心惠麟和尚塔（文政二卯年正月十五日）
。百次出生 田中氏
。白山道楽信士（貞享二丑天六月十九日）
（自然石）

。仙寿前住大暁□玄（文化三丙寅三月初四日）和尚塔

。串木野出生 中村氏

。当寺前住俊産活（天明三年癸卯五月七日）鷹和尚

。俗弟子中謹立

。当寺前住通明智達（天明四丁辰六月二十一日）

。曹源前住智水（宝暦十一土巳天十一月廿三日）鏡首座

。朱入

。碧瑞丹堂和尚（嘉永四辛亥年十月廿八日）

。外に自然石無銘 中段に一基

。右八基の左上方八間ほどの処に

自然石一基在り。

（上段）五、六間の上段に六基ある中に二基だけがわかってい

る。
。当寺八世総堂喜（天文二丁巳年八月廿二日）和尚

。閑璫（享保廿乙卯年四月廿九日）

（「山ヶ野金山寺社由來記」（石川哲著「金山由緒書中外伝金山根元記」から））

第三節 横川城とその出城

一 横川城跡の概要

横川城は別名長尾城ともいい、鎌倉初期横川藤内兵衛尉時信が築城したといわれている。城跡は市街地の西方約一四〇〇メートルの字城山の丘陵や山地にある。

城跡の北側は、東流する金山川によって浸食された深い谷が走り、急崖きゅうがとなつて、天然の要塞ようさいをなしている。東側は清水川などの合流点にあたり、平野が開けていて、城跡からは眺望のきく視野が開ける。西側及び南側は、浸食作用を受けて台地が独立丘となり、また、大小の谷が枝状に複雑に入りこんでいる。このような自然の地形、ことに浸食谷や金山川は堀とし、独立丘は郭として利用するなど、自然地形を最大限に活用した城と思われる。

町教育委員会が主体者となつて、本丸と伝えられてい



横川城跡発掘現場

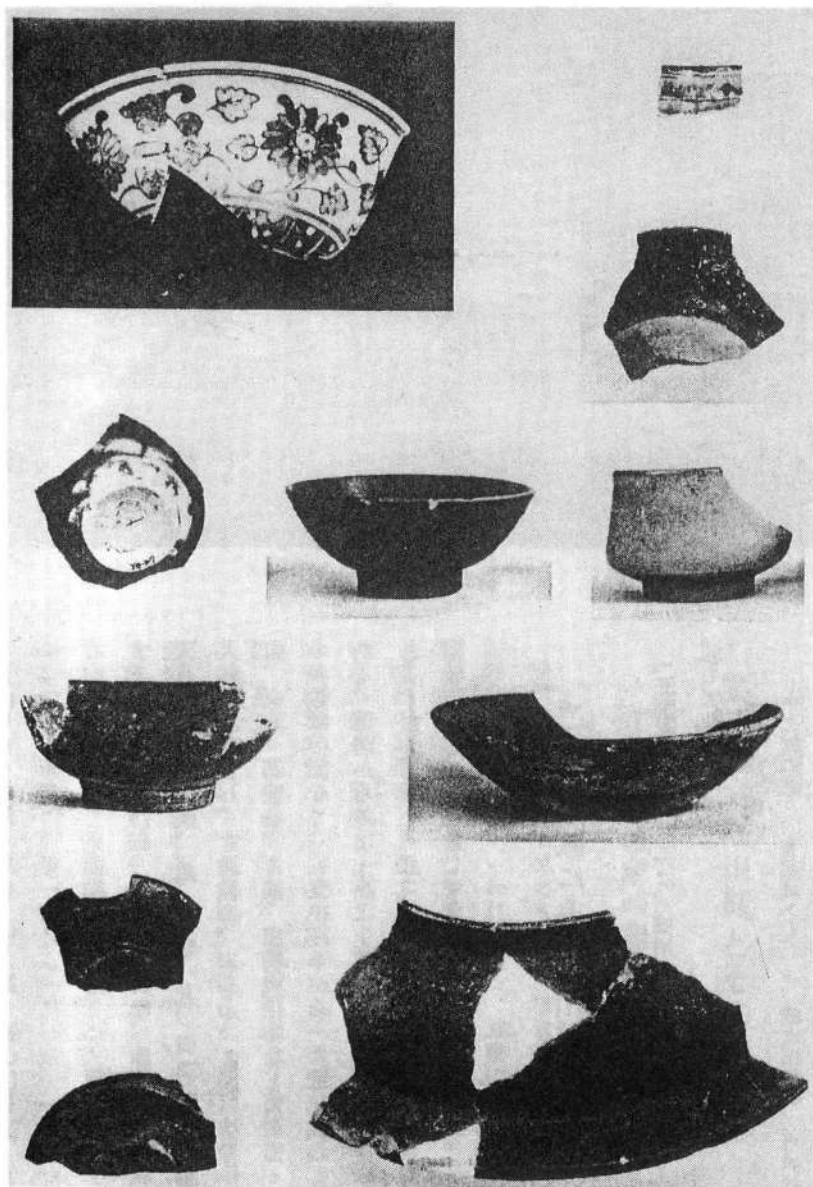
る金山川寄りの郭の部分、広さ約一五〇〇平方メートルについて、昭和六一年一〇月二一日から一一月二七日まで約一か月かけて発掘調査を実施した。出土遺物を列記すると、青磁、白磁、染付、土師器、赤絵、緑釉陶器、天目碗、陶器（碗、皿、花生、瓦、壺）、羽釜、摺鉢、火鉢、かんざし、青銅製品、キセル、小柄、小札、鉄釘、砥石、石製品、古銭、穀類炭化物などで、出土遺物の多数は中国産で一五世紀後半から一六世紀代のものである。城跡からの出土品は全部横川町郷土館に展示してある。なお、詳しくは「横川町埋蔵文化財発掘調査報告書横川城跡」に記載してあるので参照されたい。

二 諸文献にみる横川城

『三国名勝図会』には、横川城について次のように記述している。

横川城

中之村にあり、長尾城ともいふ、按に旧記に、当城は承久の比、横川藤内兵衛尉時信、此邑を領して治所とす、時信



出土品（陶磁器類・羽釜）

第3節 横川城とその出城



第3図 横川城略測図

は、平姓にて、左馬頭行盛ノ子、肥後守信基の三男、藤内左衛門信行の息男なり、時信より第六代を、河内守種氏といふ、種氏以後、菱刈氏、北原氏の領地となり、沿革一ならず、永禄五年、北原氏に内乱あり、其一族諸臣多く我麾下に属す、時に北原伊勢介、飢肥伊東氏に応じ、子新介と共に当城に拠る、是年五月、大中公溝辺に軍だちし、伊集院大和守忠朗、榎山安芸守幸久をして、伊勢介を招降せしむ、伊勢介肯んぜず、六月三日、松齡公、及び又六郎歳久、兵を督して当城を攻む、新納刑部大輔忠元、伊集院源助久春、是に従ふ、歳久は大手より松齡公は搦手口より攻給ふ、北原父子壁を開て逆へ戦ひ強く拒く、歳久奮ひ撃て是を破り、敵の逃るを追て城に入り、自ら先登す、北原父子勢ひ窮り、城中に自殺す、是に於て横川を菱刈大和守重猛に賜ふ、重猛其属菱刈中務をして当城を守らしむ、永禄十年、菱刈大膳亮隆秋、隆秋は、重隆が弟なり、重隆が關子鶴千代幼し故に家事を摂す球磨の相良義陽に与して復叛す、是年十一月、大中公隆秋を征し、馬越城を陥る、菱刈中務横川を棄て大口に奔る、城北大手口の前に、金山川流通り、其辺を大手川と呼ぶ、夫より二町許下流、丹後が潭といふ所あ

味方に招く、伊勢介聴かず、同年六月三日島津義弘、島津歳久兵を率て城を攻む、新納忠元、伊集院久春是に従ふ、歳久大手口に向ひ義弘搦手を攻む、北原父子大手の城門を開き迎戦ふ、歳久是を破り逃げるを追て城に入り自ら先登す、北原父子勢ひ窮り城中に自殺す是に因て家臣菱刈大和重猛に横川を与へ重猛菱刈中務をして城を守らしむ、同年菱刈大膳隆秋球磨の城主相良義陽に与して島津に叛く、是に因て同年十一月再び兵を発して菱刈隆秋が馬越場を陥る、菱刈中務城を棄て大口に奔る。(事は馬越城の条に詳なり)

『薩隅日州古戦場記』七二枚には次のようにある。

横川城

北原伊勢介同新助父子範候永禄五年六月三日欲攻之忠平公歳久為大將御免向被成貴久公は溝辺御神被遊新納忠元伊集院久春江被仰付横川に被差向忠平公指揮遊成御責候忠元、久春抽戦功攻之候処北原父子奮出相戦候本田刑部少輔瀧聞美作守对之終に北原父子戦死為仕由候城山は当時麓より西七八町にて御座候、南の方野頭相續き西東は谷北東の方に小川流れ大手の口にて候北原父子塚の木と申杉数本有之候へ共其木は枯申併今枯木にて有之候

大手より東荒神城と申由輪の小道の脇にて候南の野頭と申城山上の方に軍配松と申大木有之候、忠平公御軍配為被遊所

の由候然は忠平公は野頭より被遊御責候半と存候歳久は吉田の兵を率城門に攻入為遊由候へば大手より被成御攻候半と存候北原戦死の場は当時申候塚木の辺にて候哉又は別所に戦死候を当所に葬候哉申伝候も無之先北原の塚と計古老申伝候軍配松と申は当時畠中にて有之候

一、忠昌公肝付次郎左エ門兼固に被下候御責に昨日野頭の手仕一途事成候殊に彼井手の事其日の安否の由日来申候尤候処輒く切落日之事喜悦候と有之候城大手の口前に川流有之候当分井手有之候は川上に有之候て大手より間近く有之候付昔は大手の前に井手有之候故井手の事安否と有之候半と存候当時荒神下川淵御座候を色紙が淵と申昔合戦の砌紅葉様候て色紙を流候相似候故色紙淵と申の由古老申伝候

一、伊集院久春横川地頭にて城山本丸に被罷居候へ共太平の時分自由故後には仙寿寺馬場と申城麓に移居にて候て今久春父子の屋敷と申伝相知候

一、城山東の方に高山御座候城より間一町計にて候内記が城と申伝曲輪の旧跡相見得有之候へ共別に申伝候儀無御座候玄佐自記横川より千台隈城御地頭と有

大永六年

島津中務家久

地頭

樺山玄佐賜
新納十郎

『薩隅日州古戦場記』から参考として、その他の出城

とともに引用する。

一、溝辺城

此城主は元弘建武の比溝辺孫太郎守之族姓不詳氏久公御代に本田信濃守重親守之

一、横川城

此城主は文永弘安の比は左馬頭平行盛の苗裔藤内兵エ時信守之とあり、此人は大隅国守護と旧記に見へたり。種子島肥後同家なり。

一、栗野城

此城の持始は頼朝將軍の御代建久の比は栗野郡司守綱守之と旧記に有之候姓不詳中古より真幸院北原家城と成るなり。

一、本城

古此城の持初は三郎坊相印重妙と云人建久年中、頼朝將軍より菱刈院を賜り、令下向大隅州此城の主と成夫より菱刈家代々相統有て十四代目城主菱刈大和守重猛入道舜山の子権頭重豊代竜伯公より退治し給ふ、元組重妙は宇治平等院の住持と旧記にあり。

一、馬越城

此城は菱刈重妙の嫡子太良太郎隆氏守之、元享の比は馬越藤四郎行家居城なり、永禄の比は井手龍兵部と云ふ人

城主

一、馬関田城

右城上代は草部氏支配の城なり、其后肝付家の庶流北原周介範兼の弟馬関田又九郎守之なり。

一、加久藤城

右城上代は草部氏支配の要害なり、其后北原家五代の苗裔周防範兼の城となる。

一、徳満城

右上代は草部氏支配の要害なり、永享二年庚戌十一月朔日総州家の苗裔島津大太郎殿於此城為大守忠国公御生害御年十八

一、飯野城

上代此城の持初は真幸院の惣領主草部次郎年貞と云人守此城なり、此人は頼朝公より以前の城主なり。其后真幸院は総て北原家の知行と成て近代迄は令領知此此中古には惟新公の御居城なり。

一、踊城

麓より半里計西南の方にて西の方野頭といひ橋なくては絶て渡る能わず石壁巖々として、山下より見上ぐれば鳥も翔り不申体俗説に昔敵来りしも城中少しも周章不申踊を仕り居りし故踊城と申伝ふとなりと、城下の谷を限り西山日当山なり。

『鹿児島郷土史大系』第六卷三二二頁から引用する。

。北原氏との関係（島津氏）

天文元年北原氏は伊東氏と不和を生じたので島津忠朝北郷忠相の援を得て、日向国三俣院なる高城を攻めて大いに勝ち、威将八代長門守以下数百人を斬り大勝を博したのであった。

天文四年八月十四日北郷忠相島津忠朝が新納氏の所有なる末吉、松山梅北等を攻めた時には北原氏も亦伊東氏と共に来り援ふたのであった。

天文五年二月二十五日北原氏は兵を發して北郷氏の所領なる安永を襲ふたのであった。忠相は撃つて之を破った。此の年の夏に至つて、島津勝久公は真幸に来て北原氏に抛られたので北原氏は之れを保護して吉松なる般若寺に居らしめたのである。此の頃忠良公からは使が来て勝久公を帰さうとしたのであったが、勝久公は遂に帰らなかつたのである。

天文十一年始良郡溝辺なる高松城に居た、北原又八郎祐兼は同じく溝辺なる玉利の壘を攻めたのである。此の時本田重親は兵を遣はして玉利の壘を救ふた。そして北原氏の軍と、上野広原に戦つたのであるが、戦争の結果は、北原氏の大勝に歸して本田刑部大輔等数十人を斬つたのである。此の時貴久公は忠良公と共に生別府に行つて北原祐兼と共に加治木を攻めんとし、貴久公の軍は吉原に陣取り、北原氏の軍は札立に陣取つた、そして祐兼は吉原なる貴久公の許に来て軍議を擬らして歸つたのであるが、加治木城なる敵兵は那答院帖佐蒲生等の兵と共に祐兼の歸路を要撃して祐兼の軍を散々に打ち破つたので祐兼は再び振ふことは出来なかつたのである。

同年六月十八日向国志和地なる北原氏の兵は勝岡を侵さうとしたが勝岡毘山の兵は力を台せて之れを防いだので遂に之れを撃退したが、八月二十日に至つて伊東氏、北原氏の連合軍は三俣院高城に押寄せて作物の立毛を刈取つたので城中からは兵を繰出して之を追ひ小山河原に会戦し北郷尾張守忠親は都之城から兵を率ゐて来り救ふたので北郷氏の大勝に歸したのである。

初め野々美容は伊東氏の所領であつたのであるが、之れを北原氏が略奪したのを北郷忠相が更に之れを攻落して其の族人なる北郷信濃守をして之れを守らせたのである。

又山田は北原氏の所領で其の同族たる白坂左エ門尉をして山田地頭として居たのである。ところが其の山田城中に釘村伊予守といふ者が居て、私に北郷忠相に内応したのである。そこで忠相は兵を送つて山田城を取つた。

其の後北原氏が又奪ひ返して北原遠江守をして城を守らせたのである、それを天文十二年正月二十四日には北郷忠相が又之を奪つて北郷図書助忠茂をして之を守らしめて居た。

天文十二年伊東義祐は瀬平に陣して島津忠広の領を侵したので、忠広は其の家臣をして鶴戸山城に抛らしめて之を禦いだ。義祐は進んで烏帽子形に至つて鶴戸山城を攻めて、遂に之を抜いたのである。同年五月九日には北郷忠相、忠親と共に北原氏の所領なる志和地域を攻めて十一月には遂に之を陥れ、其地を取つたのである。

天文十七年本田氏に内訌あるに乗じて島津島氏は樺山幸久、伊集院忠朗等を遣はして之を計らしめたのであったが、此の時北原氏は肝付氏・祁答院氏等と共に本田董親に叛いて本田親知に味方したので、北原狩野介等をやって兵を率ゐて姫木城を守って居たのである。八月三十日伊集院忠朗は日当山を夜襲して之を下し平良尾張守や白坂助左エ門尉等を殺し、更に姫木城を攻めたのである。当時姫木城に在った本田実親や島田民部少輔等は私に島津家に内応して居たので北原狩野介等を殺さうと思つて九月五日の夜門を開いて伊集院忠朗等の軍を入れた。すると伊集院方なる田尻荒兵衛は火を放つて城中を焼いたので北原氏の軍兵等は決死の勢で奮闘したのであったが、此の時樺山幸久は生別府から姫木に来て狩野介等を勸解し、本田実親や島田民部等は本田親知と共に降参したのであった。

弘治元年我が島津氏が蒲生氏と事を構ふるに當つて北原氏は兵を免して溝辺を侵したのである。

永禄五年此の頃北原家には御家騒動が起つたのである。其の御家騒動を説明するに便利な爲めに先づ其の略系を掲げる。

北原貴兼
 又五郎寛兼
 又五郎兼門——中務少輔茂兼——兼泰——兼親
 民部少輔兼珍——久兼——祐兼——又八郎兼守
 其の他五十略す

伊東義祐の女
 馬関田右エ門佐

北原貴兼は日向国真幸院の領主であつた。真幸院といふのは吉田、馬関田、加久藤、飯野、小原の凡そ五邑の総称である。貴兼には八男があつたのであるが、此処には必要だと思ふ三子の名のみ挙げたのである。而して寛兼と兼門とは共に父に先つて死んだ。併し兼門には一子中務少輔茂兼があつたので貴兼の死後茂兼が其の後を嗣ぐことになつたのである。然るに茂兼の叔父なる民部少輔兼珍は屈強であつたので、自立して後となり真幸を領したのであつた、斯くて其の領地を又八郎兼守に伝へたのであつた。

兼守は伊東義祐の女を娶つて其の妻としたのであつたが、而かも未だ子なくして死んだので、北原家の家臣等は北原家の宗人なる民部少輔を以て其の嗣とせんとしたのであるが、偶々義祐が之を聞いて其の女兼守の妻であつたものを引取つて之を馬関田右エ門佐に嫁はしめ、右エ門佐を三山に居らしめ民部少輔を殺して真幸院飯野横川を横領したのであつた。斯うなると爾来北原氏に心を寄せて馬関田右エ門佐に快とせない者は皆散々に其の影を隠したのである。

高原竹崎の地頭なる白坂下総踰城主なる白坂佐渡介等は我が島津家に降り茂兼の孫なる北原又太郎兼親は球磨に出奔して相良氏に寄つたのである。

島津氏に於て智謀に勝れた樺山幸久は白坂氏と計つて兼親を以て北原氏の後に立てやうと思つて之れを貴久公に謀つたところが貴久公も同意されたので、白坂与一左エ門尉を兼親

の許に使はして島津家の意中を物語らせ兵を相良氏に請はしめたところが相良氏も亦之を許したので与左エ門と共に馬関田城を襲撃して之を陥れた。徳満城主なる北原八郎右エ門尉等兼親に應ずることとなり、永禄五年五月十日には兼親は飯野城に入つて真幸は再び北原氏の有となつたのである。而かも三山伊東は、之に服せなかつたのである。なほ宮某は栗野に拠り北原伊勢之介は其の子新介と共に横川城に拠つて共に伊東氏に味方したのである。

そこで島津貴久公は溝辺に本陣を構へ、伊集院忠朗と樺山幸久とをやつて伊勢之介を招降せしめようとしたのであったが、伊勢之介が之を聴かなかつたので、義弘歳久をやつて横川城を攻めさせ新納忠元伊集院源介伊集院久春等をして後継たらしめた。

歳久は大手口から義弘は堀口から進んだが北原父子は壁を開いて迎へ戦ひ強く拒いたのであったが、歳久は奮戦して之を破り、敵の逃ぐるを追ふて城に入り、自ら先登した。此の勢に制せられて、北原父子は勢窮まつて遂に城中に自殺した。斯くて横川を襲刈重猛に賜はり、重猛は其の族襲刈中務をして之れを守らせたのであった。

横川村中之村に北原塚といふのがあるが、此処は城山の入口に当るところであるが、曾て伊勢之介が自殺した後伊勢之介の怨霊が怪異をなすによつて、宝永二年八月其の追善として、郷中から、伊勢之介夫婦の墓を建てたものである。自然

石の石塔一基あつて転宗慶伝居士、月江妙秋大姉と記されてある。此の墓所に杉一株あつたのであるが今はない。石塔の三四間前に一丈にも余る老松樹があつて其れにも香花を薦めて居るのは当時の首塚でもあらう。此の墓所の下には金山の川が流れて小さい潭がある。是れを吉次が潭と言つて居るが吉次は伊勢之介の子で少年であつたが横川城の陥つた時此の潭に入つて溺死したといふことである。

又此の村の野岡の上に民部塚といふがある。之は伊勢之介の弟民部が塚であると言つて居る。民部は其の時十八才の青年で戦死を遂げたのであつた。

又横川城の北大手口の前に金山川が流れて大手川と言つて居るが、それより二町許下流に丹後が潭といふ所がある。北原伊勢之介の家老なる迫田丹後守が戦死した所であると言つて居る。

野首の方に堀手がある。堀手口から南の方軍配のあつた所であると言つて後世まで老松があつて、軍配松と名づけられてあつた。

横川なる中之村に鳥越といふ所がある。其の山の半腹に四方掘切の跡が残つて居つて地方の人の口碑に当時義弘の陣所の跡と言つてゐる。右中之村の内に陣之尾と称する所がある。此所は当時新納忠元田代甚助の陣所の跡と言つて山の半腹に掘切の跡が残っている。なお中之村の内に宇都墨二個所が残つて居る是れは山田新助、平田美作守、吉利城守等の陣

所の跡である。

始良郡栗野城には白坂下総介によって北原兼親に降り兼親の有に帰して居たのであるが、此の時樺山幸久は兼親に之れを貴久公猷せんことを勧めて兼親は之れに同意したのである。

以前から北原氏と進退を共にして居た大河平氏は兼親が島津氏に帰順することになると大河平隆次も亦島津氏に帰順したのであった。後兼親は大河平氏と不和を生じて島津義弘に献策して、大河平氏の所領なる今城の戍兵三百を撤したので伊藤義祐は其の虚に乗じて遂に今城を陥落せしめたのであった。

初め相良氏が北原兼親を飯野城に入らしめて兵を留めて之を守らしめたのである。島津家から兵衆をやつて飯野城を鎮めさせてもなほ相良氏は兵を撤しなかつたのである。後兼親が栗野を島津家に献じた後に兵を引いて飯野城を去つたのであった。

此の時北原兼親の伯父なる左兵エ尉は始良郡吉松城主であったが、伊東氏や相良氏と計つて、飯野城の鎮兵を除かんことを謀つて居たのである。会々其のことが発覚したので左兵エ尉は出奔し、北原八郎右エ門尉や、白坂与一左エ門尉などは真幸を去つて島津家に帰順したので、北原氏の勢は益々孤立の状態に陥り相良氏に脅かされて自立することも出来なくなつたので、兼親を日置郡伊集院町なる神殿に移し、島津義

弘を以て飯野城主とし以て伊東氏に備へしめたのであった斯くて義弘は真幸に移つて加久藤城を築き、又飯野城を修理して、伊東氏に迫つたのである。十一月十七日には義弘愈々飯野城に移り、其の夫人を留めて、加久藤城に置き、日向の南方なる北郷時久と計を合せて若し敵が飯野を衝いた時は三の山を攻撃して其の背後を脅かし、首尾相制するの策を立てたのである。

北原氏については、『鹿児島郷土史大系』第二巻「古代史」五二六頁から引用する。

北原氏は肝付兼貞の三男俊貞の後裔で、安楽氏と其の祖を同じくするのである。始めは肝付郡串良院に居たのであるが北原氏は、早くから伊東氏と相通じて、北原範兼の時、従来真幸を領して居た日下部貞房に代つて、真幸飯野を領する事となり、飯野に居城した。其の領地は次第に広まつて真幸院の外吉松栗野横川を併領して兵勢大いに振ふたのである。

ところが或日範兼は、球磨の城主なる相良祐頼を加久藤なる徳満城に招いて互に酒宴を張つた。其の席上に於て事を論じて、合はないのを怒つて、遂に相共に刺して死んだのであった。此の事あつて以来北原氏と相良氏との交が断絶して、範兼の子北原久兼は島津元久公に降つて、相良氏に備へたのであった。斯くて、久兼より八世を経て北原長門貴兼に至つ

北原家系図

(弘文天皇)
天神日命——大友皇子——伴姓

大伴安磨―旅人―家持―古磨―継人―国道―善男―中埔

肝付系図 (伴姓)
仲兼―兼遠―兼行 安和元年(九六八)薩摩探になり
安和二年鹿兒島神食村伊勢に下る―行貞

兼貞―肝付郡并済使となり 島津莊平季基の娘をめとり其の嗣となる

①肝付 兼俊 兼経―兼益―兼貞―兼石―兼藤―兼尚
②萩原 兼任 兼綱 兼持 兼延 娘
③串良北原城主となる 真幸収納使(康永二年(一三四二))

安榮 俊貞 俊清 兼貞 兼俊 兼貞―玄兼―玄幸
兼幸 北原兼延養子 兼貞―玄兼―玄幸

⑤範兼―久兼―兼興
⑥貴兼 寛兼 兼門 茂兼 兼泰 兼親―兼茂―上途中略―
⑦左兵衛尉 兼定(比心島家養子) 現在北原勝雄
⑧左頭 久兼 民部少輔 左頭神に祀る 祐兼 民部少輔
⑨民部少輔 兼珍 兼守
⑩民部少輔 兼理 川路大督現用
⑪水禄四年十月二十四日 兼孝親子飯野城に火を
かけ自刃す



た。貴兼には三人の子供があった。長男を寛兼と言ひ、二男を兼門と言ひ、三男を兼珍と言つた。寛兼と兼門とは先立つて死んだ兼門に一子があつてそれを茂兼と言つた、貴兼の死んだ後に茂兼が北原氏を嗣ぐことになったのであるが叔父なる兼珍は之を奪つて真幸を領したのである。そして其の子孫の兼守が嗣いだ、兼守は伊東義祐の女を娶つたが子供が一人もない。そこに主人の兼守が死んで仕舞つた。家臣等は協議して茂兼をしてその後を嗣がせやうとした。ところが伊東祐親が之を聞いて兼守が妻であつた自分の娘を北原氏の一族である馬関田右エ門に嫁はせて茂兼を殺して仕舞ひ北原義の領地であつた真幸、吉松、栗野、横川等を悉く伊東氏祐が横領して仕舞つたのである。

祐親に殺された茂兼には一子兼親といふのがあつた。兼親は球磨に通れて相良に倚つたのである。其の外北原氏の家臣等は各地に通れ去り、真幸は大いに乱れたのである。すると島津貴久公は此の乱を鎮めて、兼親を球磨より招き歸して北原氏の後を嗣がせ、飯野に居城せしめた。すると永禄七年に兼親の叔父なる北原左兵衛は吉松城に在つて叛を謀つたのであるが、未だ発せない前に発覺して、親ら敵し難しと見て出奔して仕舞つたのである。貴久公は斯く

骨肉の間擅に利慾の爭奪をして勢自ら窮て行くのに一方には勢猛き伊東氏があり、又一方には相良氏の其の後を窺ふものがあり、斯んな渦中に夾まって居る北原氏の領地であるのに、現在の兼親が、其の勢を以てしては逆も勢の挽回どころでなく、之を維持することさへ、風前の灯火同様の危険であることを察して遂に兼親を伊集院に移して島津義弘公をして真幸院を領せしむることとしたのである。

『島津義弘公記』一二二頁には次のように書かれている。

時に三山より以東は伊東氏に随ひ、飯野より以西は島津氏に属す、唯宮路某は隅州栗野に拠り、而して北原伊勢介は子新介と横川城に拠りて未だ降らず、屢々我境を侵す。貴久公大旆を溝辺に前め、先づ伊集院忠朗、樺山幸久をして、伊勢介を招降せしむ、肯ぜず。六月三日義弘公及又六郎歳久を遣はし、大軍を以て横川城を攻め、新納刑部大輔忠元、伊集院源介久春をして之に繼がしむ。義弘公軍を耀かし士卒を勵まし、城を囲んで疾く攻む。城兵遁れざるを察し防戦最も力む利鐵馳せ、白刃乱れ、肉飛骨碎吾兵屈せず、勇を鼓して將に城に登らんとす。城將父子事急なるを知り、躍進して士卒を指揮す。本田刑部少輔、滝間美作守、目を注いで之に迫る。忠元、久春縦横敵兵を斬獲し、歳久吉田の兵を率ゐ、奮戦して城門を奪ひ、身数傷を被る、義弘公亦屏を越ゆ、玄甲の勇

士大刀を以て其兜を打つ。竹之下又右エ門腕を以て之を受け腕割く、公乃ち上る、城將父子刀端き屠腹して死し、城竟に陥る。首を取ることも数百級我軍亦死するもの多し。貴久公横川の地を擧げて菱刈氏に賜ふ。菱刈氏乃ち誓紙を献す。

『飯野郷土史』弘編八三頁から引く。

兼守が小林城で瞑目したころ、北原氏の家中は宗教的に二分して、互に相反目していた、一つは真宗派であり、他は反真宗派であった。真宗派のリーダーは民部少輔（兼孝）と高原城主白坂下総介であり、反真宗派のそれは小林の平良氏（中務大輔兼賢）であった。伊東義祐も後者だったというから馬関田右エ門佐もそうであったに違いない。北原氏の乱は単なるお家騒動に止まらずこうした宗教的葛藤を伴っていたので、その対立は甚だ深刻なものであった。民部少輔は領民に対して、真宗にならぬものは打殺すといったとも伝えられる。そこで遂に妥協の可能性なしと見た反真宗派つまり右エ門佐派では反真宗派の親玉、平良氏に兵をさすけて、飯野城の民部少輔を攻撃させた。ともいうし、また民部少輔父子を呼びよせて、ともに自害させたともいう。兎に角、このお家騒動並に宗教的争いは、立役者の民部少輔が自害して果てたので、真宗派の完全な敗北に終わった。そこで相棒の高原城主白坂下総介は同族の牧園城主、白坂佐渡介とともに、領地を島津氏献じて、その家臣になった。下総介にならって真

宗側では、他領に亡命した者も多かったらしい。島津氏は猛烈な真宗ざらいだから、多くは日向の他地方または球磨をさして落ちて行ったという。

以上のように北原氏の乱は単なるお家騒動でなく、旧島津領内における最初の真宗信者が主演として活躍し且つ最初の殉教者になった点およびそれが飯野を舞台として演じられた点において、我々は重大な関心を抱かずには居られない。

北原民部の戦死について、『長尾城史』は次のように記述している。

島津の大軍が横川城を攻めた時、民部塚において、我こそは横川城主北原伊勢守の弟同性民部なりと、多勢の中に唯一人切っかかり、其の勢鬼神の荒れたる如く、髪は振り乱し、矢疵刀疵鮮血漂漂と流るれども少しも之に屈せず、多勢を対手に切り結ぶ。然れども早朝よりの激戦に最早精力尽き果てゝ暫く傍なる松の根元に息つき八方を見れば、今や我軍は大方討たれ、四面皆敵中にて城に入ること思ひもよらず、所詮免れざる身なればとて既に自害せんと思えども、今一目兄伊勢守に見え今生の別れ致さねばとてさすがに別離の情禁じがたく、又もや勇を奮い多勢の中かけ入ればこかしこに、それ民部を逃すな、それ締め取れと、口々に呼ばわり切ってかかる。今は絶体絶命いかんともする能わず、目に余る

大軍をにらみ大音にて「北原民部の最期を見て後世の手本にせよ」と呼ばわり、腹十文字にかき切って、行年十八歳を一期として横川城頭の露と消えたのである。

三 古城跡と出城

1 陣之尾

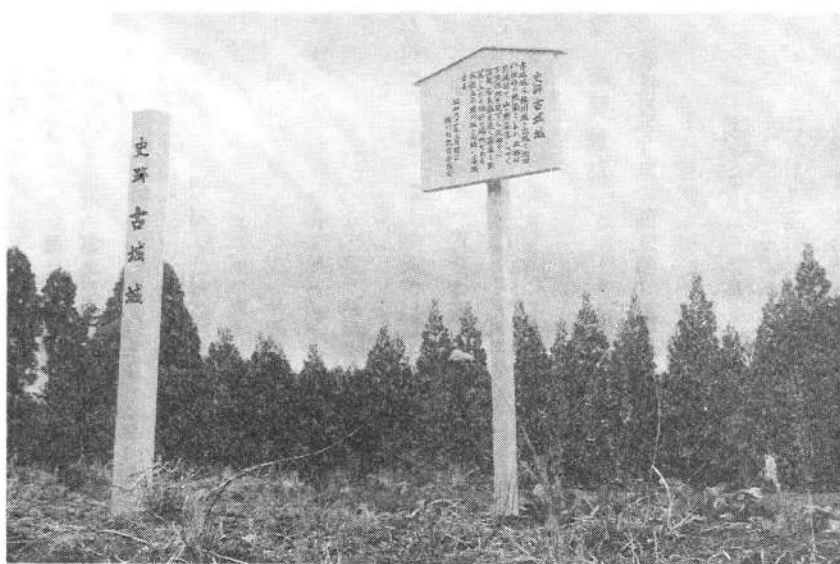
町の市街地から南の方一キロメートル足らずの小高い丘で、現在は檜林になっている。ここは島津勢が横川城を攻めたとき、寄手の武将新納忠元、田代甚助が陣をとっていたところで、山の中腹に掘り切りの跡が残っている。

2 古城城跡

上ノ古城平原の西北隅、県道宮之城牧園線から一〇〇メートルほど入ったところである。古城城の本丸であつたらしい台地は、二、三反の広さであるが、北、西は急傾斜で、山ヶ野集落につづく下流低地を見下ろし、北向こうに、古書に「大野滝を見下し」とか書いてあつたと



陣之尾

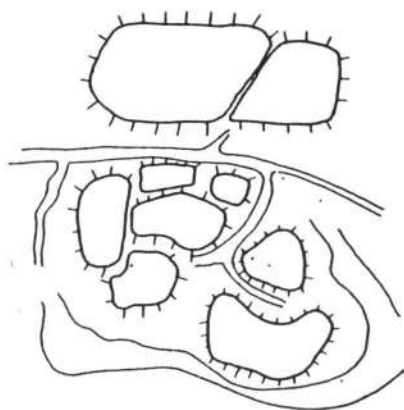


古城城跡

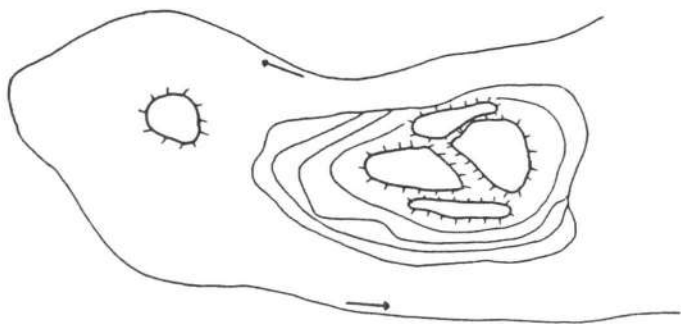
いう場所に合致し、国見、安良嶽を近くに、遠く霧島を眺望に入れる格好の場所である(第4図)。

現在の地主は古城享であるが、先祖は昔この城の炊事番であったといい、長持の中に古い記録があったそうだが、今は全く残っていないとのことである。この城跡の三か所に今も氏神さまとして御幣を供えお祀りをしてある。

なお、谷口咲雄方の北の岡を旗立野といい、小脇方面から見ると、いかにも城跡らしく見えるが、本丸と台図の旗を揚げる所であったのではないかといわれている。



第4図 古城略測図



第5図 鳥越城略測図

また、馬走らせ場、木屋木、御鉢田などの地名もあって、幾多城跡を思わせる場所がある。一説にはこの城は迫田丹後守が構築したのだともいう。古城城は横川城の出城で、永禄五年(一五六二)同じく落城している。

3 鳥越城跡

横川中央公民館

から東の方約二〇〇メートル、県道宮之城牧園線の北の小高い丘で、現在は雑木林になっている(第5図)。ここは島津勢が横川城を攻めたときの松齡公(島津義弘)



鳥越城跡

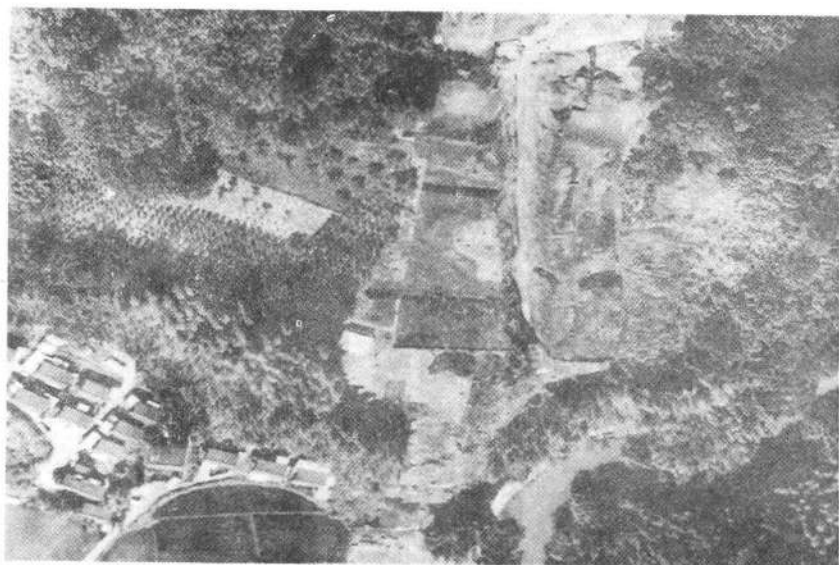
の陣所といわれている、西から北、東に金山川がめぐって、尾田の滝から溪流が谷底深く流れて要害堅固の場所である。山の中腹の東西に長く台地が築かれ、中央を東西に掘り切って、いづれへも立ち働き得るようになっているし、二つの頂上の台地は城を構えるに適している。松齡公の陣所とされる前は横川城の出城として、鳥津勢に対抗したのではないかといわれている。

4 中尾田城跡

城跡は横川町中央公民館から北東へ約一〇〇メートル、栗野岳から王ノ山へ連なる台地舌状台地の先端、標高二一〇～二二三メートルのところにある。

眼下には金山川と清水川の合流した天降川が流れている。中尾田城は横川城の支城として伝えられているが、詳細は明らかでない。

九州縦貫自動車道建設に伴って、昭和五三～五四年に県教育委員会で発掘調査が行われている。詳しくは「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書」(二二)に記載されている。



中尾田城跡発掘現場

丹後が淵は北原伊勢介家老丹後守が四尺五寸（約二三六センチメートル）の大太刀を振りかざし島津下野守久元と戦って戦死したところである。作者は不明であるが、丹後が淵について次のような詩が残っている。

丹後が淵

一、昔のお城のすぐ下に

丹後の淵はあるのです

青々すんだ淵の片

大きな石がありました

石に並んできました

丹後の守の物語

二、この谷あいひしひしと

血気の勇もおしよせた

島津の勢は二万五千

守った兵は名にし負ふ

建武の昔精忠を

つくした北原伊勢の勢

三、縦横機略の横川勢

さんさん敵を追ひました

けれども敵は多勢です

城兵心死の奮戦も

今は万策つきはてて

落城の危機は迫ります
四、金山川の清い水

赤い血潮がそめました
歴史はすぎて四百年
大きな石もこの水も
悲壮な丹後の死ぎはを
黙って見てたことでしょう

城山三題（竜庵試作）

。嗚呼横川城（慰北原氏之霊）

晨高千穂夕叢風（訳）
北原氏は横川城に立て籠って、あした
晨には高千穂を望み、夕べには風をう
けて日夜武を錬ることを忘れず、しか
も大志を抱いて他に屈従することを欲
しなかった。かくて数万の島津勢に囲
まれて孤軍奮闘したが、ついに空しく
崩れ、城主はじめ自刃全滅し去ったの
は誠にいたましい。

。城山荒廃造林可急

昔時美林荒廃甚（訳）

昔は松杉の老樹で美しかった城山が、
今は盗伐開墾に任せて荒れ果てて、伊
勢介の墓石も叢間に没してだれも花水
を捧げない。この際将来を思い計つ
て、造林を急いだならば、年々大きく
なって町の資産がふえるだろうに。
年々歳々加資産

。百年後の城山

老樹亭々矛突天（訳）

百年経ったのちの城山は、老樹が亭々
として穂先が天を突き、空にそびえる
であらう城のあたりには、涼しい風が
音楽をかなで、奇麗に掃除された伊勢
介の墓前には、いつも香煙が立ち昇
り、横川町の富は城山をはじめ森林資
源がゆたかで、町民の幸福がいよいよ
富有余町礎弥添

北原伊勢介夫妻の石塔は、本丸跡に立っているが、そ

の碑に「永禄六^{癸亥}年六月初三日」と刻されている。こ

れは永禄五年とすべきところを「地誌備考」に住人北原

伊勢守落城という偽書を信じて書き誤ったのだろうとい

われている。

第四節 下ノの古跡

1 佐々木城

佐々木城は、鎌倉時代の武將佐々木高綱の居城といわれ、下ノ馬渡、山住、岩穴の中間標高二七二・八メートルの大崩にある。四方が深い溪谷で、「城は入り口を防げば陥落することなし」といわれるほど、要害屈強の城であったといわれている。現在は檜林になっている。

さて、佐々木氏は近江（滋賀県）の豪族で、宇多天皇から四代目の鎮守府將軍源成頼が、近江佐々木庄に土着したのに始まる。秀義が源為義に仕えて以来鎌倉武士の名門として栄えた。高綱は秀義の四男である。

佐々木氏略系図



佐々木城跡

高綱は源頼朝に従って、平家追討に功をたてた。平治の乱後京都にいたが、治承四年（一一八〇）頼朝挙兵の際石橋山の合戦で、平家方の大庭景親等の軍と戦った。

また、寿永三年（一一八四）源頼朝が木曾義仲を討った際の宇治川の渡河戦で、梶原源太景季との先陣争いは有名である。頼朝の秘蔵する名馬「生唆」に跨がる高綱と、わずかに後れて続く同じく頼朝秘蔵の名馬「磨墨」に跨がる梶原源太景季の先陣争いは壮絶を極める。一計を安じた景季は、「佐々木殿ッ馬の腹帯が緩んでいるぞ」と怒鳴った。高綱が一瞬はっとして腹帯を改める瞬間、景季は高綱を追い越して先陣を奪う。欺かれて一旦は先陣を譲ったが、高綱は一直線に急流を押し渡る。卑劣な手段で先頭に立った景季は、急流に押し流されて敵陣よりやや下流に着いたため、高綱に再び先陣を奪われたのである。

高綱は平氏追討の功によって備前（岡山県の東南部）、安芸（広島県の西部）などの守護となった。

2 いけずきの墓

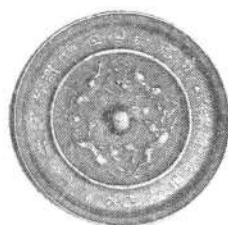
いけずきは開聞産の馬で、源頼朝が家来を遣わして求めたものだといわれている。宇治川の先陣争いで、人々はいけずきの底知れぬ脚力を褒めはやし、日の本一の誇りをほしきままにしたのである。そのいけずきが埋葬してあるといわれるところは、赤水の岩堂観音へ通ずる道路入り口から約一五〇メートルほど入った左側の雑木林で、高さ一・五メートルの無名の自然石が立っている。

3 赤水家秘蔵の古器物

下ノ字赤水の赤水家に古来秘蔵している鏡、轡、玉の古器物三つがある。

- (1) 鏡の一つは直径四寸（一二センチメートル）で青銅らしい金属製である。今は錆びて曇って映写しないうえ、裏面には種々の木草鳥虫の彫刻がしてある。いま一つは直径三寸（九センチメートル）で、裏面には麒麟（あるいは馬）らしい彫刻があつて、その周囲に「賞博秦王鏡則不惜千金非開欲照胆時是自明心」の文字が刻してある。

- (2) 次は玉で、高さ九分（二・七センチメートル）、径



鏡

八分（二・四センチメートル）、底面は径三分（〇・九センチメートル）ぐらゐの平面で、材質はすりガラスのようで、頂点は鈍円形である。大体からいえば、全体は円くかつ純透明で、一見水晶の玉のような工作精巧なものである。鏡も玉も記録したものが

なく、その

由緒は分か

らないが、

伝来家宝と

して珍重さ

れている。

(3) 次は轆で

ある。今は

腐蝕して役

に立たない

が、もとは

余程頑丈な

ものであつ

たらしい。

これこそ佐々木高綱が、宇治川先陣の際、乗馬いけずきにくわえさせていた轆だと言ひ伝えられている。なお、当家にはいけずきに使用した馬鞍うまくらがあつて、「鎌倉どんからもらった金覆輪の馬鞍」と称し、屋敷内に埋めてあるともいわれている。

このほか

に赤水家に

は、直径五

〇センチメ

ートル、高

さ三〇セン

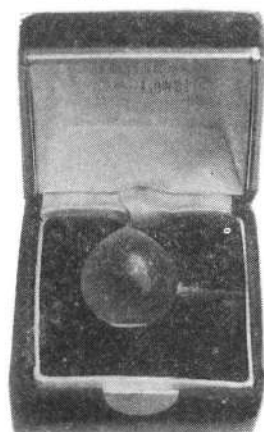
チメートル

ほどの美しい形の茶臼ちうす、

塗り物の食器などが残っている。これらは佐々木城主子

孫の持ち物であらうと推察される。なお、屋敷内に御堂

があつて、釈迦像を安置してある。



玉

4 今別府家の氏神

下ノ小原に飯場という小字がある。そこに今別府弘家

の氏神があつて、佐々木高綱を祀つてあると言ひ伝えられている。また、伝来の家宝として法螺貝ほらがいが秘藏ひそうされている。これは佐々木高綱が軍陣に用いたものであると言ひ伝えられている。なお、記録も添えられていたのとことだが、今は紛失して残っていない。

佐々木小唄（昭和二年竜庵作）

- 。 佐々木よいといつでもおいで、春の頃にはわらびとり
- 。 きのこ欲しけりや杉谷まわろ、雉もけんけん鳴いている
- 。 雨を乞うなら二牟礼行こう、柳小池は県道すじ
- 。 同じ流れの前川内、岩穴、須川明神名が高い
- 。 何で赤水、岩堂の観音、史跡めぐりは夏がよい
- 。 黒葛原行きや田んぼが広い、汽車が眺めに入るところ
- 。 西瓜大根馬渡小原それに山住一流れ
- 。 佐々木城あと探ねて見やれ、谷間うぐいすホーホケキヨ
- 。 炭はいつでも焼かれて出るよ、山のえものは未だ多い
- 。 校区一九佐々木の学校ころまとまるよりどころ

5 子産恵の宮神社

岩堂観音の下手二〇〇メートルほどのところの洞窟内どうくつにあって、子恵の神、お産の神、お乳の神の三神が祀られている。このことについては次のような伝説がある。



子産恵の宮神社

村人たちは岩堂観音を、世の中のすべての望みや頼みごとをかなえる神さまとして崇敬している。

その昔、村人の中に子供ができず、悩む若い夫婦がいた。夫婦は岩堂観音さまのことを聞き、再三再四参り祈願した。ところがある晩のこと、夫婦の枕元に神さまが現れ、「子供をそれほど望むならば、わが所から下に一〇〇尋（一八〇メートル）下れば子産恵の宮がある。そこを訪ねるとよい」とお告げがあった。

夫婦は大喜びで夜もまだ明けやらぬころ家を出て、やぶをかき分けかき分け幽谷（ゆうこ）に下り、子産恵の宮を訪ねたが、途中は大きな岩で先に進めず、三日三晩がかりでやっと訪ねあてたという。

宮さまに子供がほしい旨を告げると、神さまは、「ここに甘かずらで作った甘酒がある。これを飲むがよい」と

と言われ、夫婦に竹の筒に汲み与えた。

夫婦は大喜びでこれを持ち帰り、朝な夕なに祈り飲んだ。するとその年の秋の夕暮れ、夫婦が望んでいたかわいい玉のような赤ちゃんに恵まれた。ところが、子供は

生まれたものの、母親に乳がなく困ってしまった。夫婦はまた宮さまのことを思い出し、再び訪ねて祈願すると、宮さまはまた甘酒を汲み、母親に飲まされ、子供に飲ませるようにと言って竹筒に汲んでくださった。母親の乳は日増しにふえ、子供はみるみる元気になり、丈夫な子に育った。

その後夫婦がみたび岩堂を訪ねると、宮さまの姿はなく、甘酒も水に変わっていたが、「子供に恵まれない者は、この水を飲むがよい」と書き記されていた。夫婦は宮さまをしのび、二柱の子産恵の神さまと、一柱の乳の神さまを立て、祀ったことである。

今でも、チンタッ、チンタッと甘酒をしぼる音が、昔ながらに流れ落ちている。子産恵の宮神社は、今もなお子供に恵まれない人、乳の出ない人、安全の願いなどに、隣接の町から、また、鹿児島や遠く宮崎、関東方面からも参拝者が絶えない。

6 逆修宝篋印塔

宝篋印塔は、宝篋印陀羅尼經（ほうきやくだわにきやう）を納めるところから略称



永留氏五代頼均の逆修宝篋印塔

された供養塔で、五輪塔とともに石塔の主流をなしている。

形は一般に相輪、隅飾りをつけた笠、方形の塔身、階段状の台座及び基礎からなっている。

密教系（真言宗）の塔婆として鎌倉時代以降に建てられ、のちには宗派をこえて墓塔として多く建てられている。

横川には、肥後国永留氏の逆修宝篋印塔が三基ある。

これは生前に法要をして自分の冥福を祈るために建てたものである。



永留氏八代実重の逆修宝篋印塔

。 永留氏五代頼均……………下ノ梅ノ木迫（南北朝時代）
。 永留氏八代実重夫妻……………中ノ中尾田（室町時代）
ところで、この石塔にかかわる永留氏のことに触れて

みると、永留氏は肥後国相良氏の庶流である。相良氏は藤原南家乙麻呂の流れで、鎌倉初期、肥後国人吉庄の地頭職を得た御家人で、同地の支配に根ざし、領主、戦国大名へと発展していった。

藤姓相良庶流永留氏系図によると、第三代頼親は、その子頼明が幼少であったので弟頼俊を世嗣とし、頼明は球磨郡山江村山田を領して永留氏を名のった。また、永留九代長重が、相良第一一代の宗家を継いで長統をとなえた。

藤姓相良庶流永留氏系図



南九州古石塔研究会黒田清光（鹿児島市）の説によれば、もし永留氏が歴代山江村の山田城にあったとすれば、その墓碑が残されるはずだが全く存在しない。永留氏が山田城主であったとされることには疑問がある。また、氏の調査では、永留氏の宝篋印塔は、栗野町稲葉崎

や田尾原、二渡の供養塔群内や、菱刈町平沢津供養塔群内にも確認されており、横川町中尾田や梅ノ木迫磨崖前にも確認、さらに、薩摩町弓之尾や大口市内でも舟之川や戸切、鳥巢に確認され、東郷町内でも山田、南瀬、小鷹に確認され、川内市戸田や宮崎県飯野にまでも確認されている。

このように薩隅の北部に広範な地域にわたって、鎌倉期の永仁七年（一二九九）以降永留氏の歴代が続いて、室町末期に及ぶ一八〇年、その足跡を石塔に托して残していることからしても、永留氏が山江村山田にいたことは疑問であるという。

町内には三基のほかに、永留氏の宝篋印塔と思われるものが、下ノ前川内と後川内との分水界にあたる丘の上にある。周辺の人は時仏ときほとけといっている。その昔、ここで時の鐘を打っていたと言い伝えられている。